



多文化共生

このまちで、共に生きる

外国人が増えたと感じる

市内ですれ違う人や、コンビニエンスストア、飲食店などで働く人を見て、「外国人が増えたな」と感じることはありませんか。

市内で暮らす外国人は年々増え、今では人口の約12人に1人(図1)。国籍別に見ると、ネパールやフィリピンをはじめ、さまざまな国籍の人たちが暮らしています(図2)。

成田で働き、生活する人が増えていく

成田空港の発展とともに、多くの人が成田で働き、暮らしていきます。その中には、外国から来る人も成田の未来を考えることは、外国人と共に暮らす地域のあり方を考えることでもあります。

違いを知り、共に暮らす

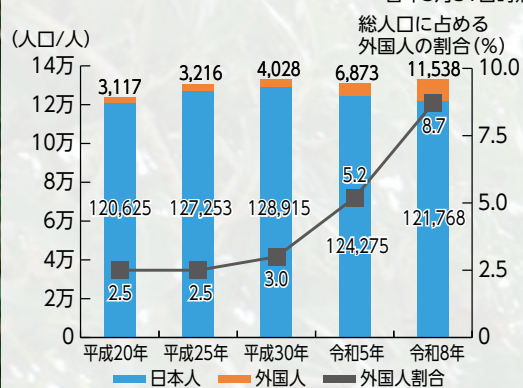
国籍や文化、言葉の異なる人たちが、互いの違いを知り、必要なことを伝え合いながら同じ地域で暮らす。そうした地域をつくる考え方を「多文化共生」といいます。

この特集では、市内で暮らす人の声や地域で活動する人の姿を通して、共に暮らすためのヒントを探ります。



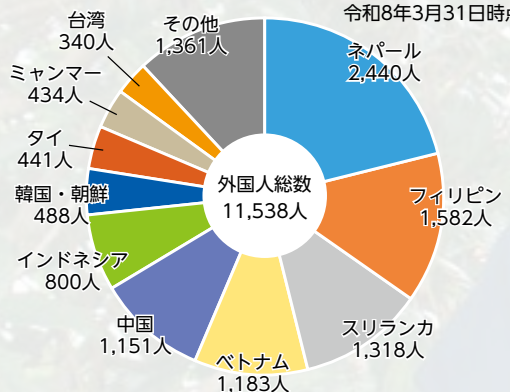
成田市の人口・外国人の人数と割合(図1)

各年3月31日時点



外国人の数と国籍(図2)

令和8年3月31日時点





多文化共生って必要？

日本人にも外国人にも、それぞれ居心地の良いコミュニティがあります。それぞれの輪の中で暮らしていくこともできる中で、なぜ共に暮らしていくことが必要なのでしょう。



地元の人に親しまれる古民家レストランで働くマリーさん

同じ地域で暮らしていても

日常生活を送る上で、ごみを出す曜日や場所、生活音への配慮、近所付き合いなど、さまざまな決まりやマナーに関わる場面があります。

外国人にとって、こうした決まりやマナーは分かりにくいことがあります。説明を受けても、言葉や表現によっては、十分に理解できないことがあるかもしれません。

「知らない」から生まれるすれ違い

私たちは、外国人がなぜそのような行動をしたのか、理由が分からないことがあります。

背景を知らないと、ちょっとした違いを「マナーを守らない」「考え方が合わない」と判断してしまいます。

一方で、外国人にとっても、地域の決まりが十分に伝わっていないければ、守ろうと思っても、結果として守れないことがあります。その様子を見た日本人が「ルールを守らない」と判断すれば、外国人は「自分たちは受け入れられていない」と感じるかもしれません。

その結果、外国人は地域との関わりを持ちにくくなり、日本人には不安や不信感が残ることがあります。

関わりを持つ意味

互いの文化や価値観を知ることが、相手の全てを理解したり、同じ考え方になったりすることではありません。違いがあることを前提に「なぜ、そのように考えたり行動したりするのだろう」と、相手の背景に目を向けることです。

多文化共生は、外国人だけのために特別な対応をすることでも、日本人が一方的に受け入れることでもありません。同じ地域で暮らす人々が、文化や生活してきた環境の違いによるすれ違いを減らし、誰もが地域の一員として関われる関係をつくっていくことです。



国籍ではなく 一人の人間として

成田シェアハウスきのこくらぶ
運営管理担当
いなむら めぐみ あきえ
稲村 萌さん(左)・朱恵さん

成田シェアハウスきのこくらぶでは、日本人と外国人が共同生活をしています。トラブルを防ぐため、あいさつやごみ出しなど、暮らしの中で気を付けることをまとめた「100のルール」を設けています。ルールを守ってもらえるよう働きかけ、改善が見られない場合には、ペナルティを科したり、退去を求めたりすることもあります。シェアハウスは、昔から住んでいる人が多い住宅街にあります。近隣から苦情を受けたことはほとんどありません。

共同生活で起きるトラブルは、外国人だから、日本人だからとひとくくりにはできません。ルールを分かりやすく共有し、国籍で人を判断せず、一人一人と向き合うこと。こうした姿勢は、地域で共に暮らすことを考える上で、一つのヒントになると思います。



当たり前が違う

古民家レストラン和香
NARITAビジョナリー代表
おの でら
小野寺 マリーさん

中学生の時にフィリピンから日本に来ました。言葉が分からず戸惑いましたが、公民館の日本語教室で少しずつ学び、学校の友人や先生、地域の人にも助けてもらいました。今では近所付き合いもあり、隣のおばあちゃんが留守中の家の様子を気に掛けてくれたり、鍵を忘れて家に入れなかった子どもを預かってくれたりと助けられています。

日本とフィリピンでは生活習慣が違います。例えば、フィリピンでは朝から大きな音で音楽を流すことがあります。一方で、日本では静かに過ごすことがマナーとされています。国や環境が違えば、何が良くて何が迷惑になるかという「当たり前」の基準が全く違います。

日本で暮らす以上、日本のルールやマナーを守る必要があります。その上で、互いの文化や考え方を知り、理解し合うことが大切だと思います。

コミュニティを越えて互いを知る

行政書士として、市内の外国人から在留資格や仕事、暮らしに関する相談を受けています。外国人の困り事は、日本人と同じで、お金・仕事・医療・教育など、暮らしに関わる人が多いです。外国人もまた、私たちと同じ地域で生活する人なのだと感じます。

日本人も外国人も、それぞれのコミュニティの中で生活していることが多いと思います。日本人には職場や学校、地域の知り合いとのつながりがあり、外国人にも、同じ国の人や職場の仲間とのつながりがあります。そこが居心地の良い場所であれば、日々の暮らしはその中で成り立っていきます。

それぞれのコミュニティがあること自体は自然なことです。ただ、互いを理解しないまま、それぞれのコミュニティが大きくなっていけば、将来的に分断につながる可能性があります。相手を知らなければ、目にした行動だけで判断したり、誤解したりすることもあります。

だからこそ、無理のない範囲でコミュニティを越えた接点をつくり、互いを知る機会を持つことが、分断を防ぐために大切だと思います。



困り事から祭りの話までざっくばらんに

行政書士村岡事務所
元JICA青年海外協力隊員
むらおか だいすけ
村岡 大輔さん





第2章

共に暮らす地域をつくる

地域の決まりを身近な人が教えてくれたり、困った時に声を掛けてくれたりするから、私たちは安心して暮らせます。地域に住む外国人も日本人と一緒に、そんなつながりをつくっています。

情報を分かち合う

暮らしに必要なことを、身近な人から教えてもらった経験はないでしょうか。地域の情報は、行政からのお知らせだけでなく、住民同士の声掛けや、同じ経験を持つ人からの共有によって伝わっていきます。

知っている人が、まだ知らない人に伝える。そのつながりが、安心して暮らす助けになります。

困り事を一緒に考える

暮らしの中の困り事は、身近な人に相談したり、地域で話し合ったりすることで、解決の糸口が見つかることがあります。市内で暮らす外国人も、自分の経験や人とのつながりを生かして、情報を伝えたり、困っている人を支えたりしています。

誰かに支えてもらうだけでなく、自分も周りの人を支える一人になる。人と人とのつながりが、共に暮らす地域の土台になっています。

市はどんな取り組みをしているの？

暮らしのルールを多言語でお知らせ

ごみの出し方や交通ルール、生活音への配慮など、地域で気持ちよく暮らすためには、生活のルールやマナーを知ることが大切です。

市では、こうした情報をまとめた冊子を多言語で作成し、市内で暮らす外国人の皆さんにお知らせしています。

日本人も外国人も、互いの価値観を尊重し、共に安心して暮らせるまちを目指していきます。



市民協働課
たくぼ しゅうへい
田久保 修平さん



成田日本語教室
代表
おかだ ゆきお
岡田 幸雄さん

言葉を学び、伝える力を養う

生活や仕事に必要な日本語を一人一人のレベルに合わせて教えています。また、文化や暮らしのルールも伝えています。

日本語を学ぶことは、言葉を覚えるだけではなく、分からないことを尋ねたり、自分の思いや困り事を伝えたりする力にもつながります。

言葉の壁は、外国人だけが努力して乗り越えられるものではありません。ゆっくり話す、難しい言葉をやさしく言い換える、分からない時は一緒に考えるなど、日本人が歩み寄ることも大切です。

小さな思いやりが、互いの理解を助け、安心して暮らせる地域につながると思います。



一文字ずつ指で追いながら



成田第1県営自治会
会長
**ネパリ・テク・
バハデュルさん**
ネパール出身

暮らしの問題に向き合う

自治会では、日本人と外国人の間に立ち、暮らしの中の問題に対応しています。公園で子どもの声について苦情があった時は、帰宅時間や静かにする時間を知らせるポスターを作りました。日本人の自治会員にも協力してもらい、イラストを使って分かりやすくしました。

毎月の清掃後に会議を開き、その時の問題や対応を話し合います。清掃は、一人で暮らす高齢者の様子を確認する機会にもなっています。

日本人か外国人かに関係なく、同じ地

域に暮らす住民として、話し合いながら一緒に暮らしやすい環境をつくっていきたいです。



日本人と作ったポスター



ナリタネパール
代表
グルン・ビザイさん
ネパール出身

日本のルールを仲間に共有

ナリタネパールは、ネパール出身の仲間が集まるコミュニティです。今では300人ほどがつながっています。

私たちは、日本で暮らす上で守るべきルールや暮らしに役立つ情報を共有しています。来日したばかりの頃、私はごみの分別や電車の乗り方が分からず、言葉の面でも苦労しました。その経験から、市役所などから届いた情報をネパール語にして共有するほか、ごみの出し方や交通ルールも繰り返し伝えています。

後から来たネパール人が日本のルール

を理解し、一人一人が地域の一員として暮らせるよう、これからも伝え合っていきます。



フェイスブックで情報を共有



にぎやかな時間を一緒に過ごす

第3章 小さな交流から

言葉が通じるか不安で、つい身構えてしまう。そんな時は、まず笑顔であいさつから。簡単な言葉やジェスチャーでも気持ちは伝わります。小さな一歩が顔見知りを増やし、つながりを育てます。

文化に触れる

異国のあいさつや料理、音楽、祭り。なじみのない文化に触れると、「どんな味だろう」「どんな風に楽しむのだろう」と、相手の暮らしに関心が湧くことがあります。料理教室で初めての味に出会ったり、聞き慣れない言葉の意味を知ったり。そんな小さな発見が、次の会話のきっかけになることも。

まずは知ることから。遠く感じていた存在が、少し身近に思えてくるかもしれません。

小さな関わりの積み重ねが地域を育む

顔を知っていれば、地域の活動に誘ったり、困っている時に声を掛けたりしやすくなります。ごみの出し方など、ちょっとした疑問を尋ねるきっかけにもなります。

初めての場所に加わる時は、誰でも戸惑うもの。言葉や習慣が違えば、なおさらかもしれません。

あいさつを交わす、行事を一緒に楽しむ、顔を覚える。関わり方も、そのペースも人それぞれです。

文化を知り、同じ時間を過ごし、顔見知りになる。その積み重ねが、困った時に声を掛け合える関係や、地域のつながりを育てていきます。

小さなきっかけから、誰もが安心して暮らせる地域が広がっていきます。

スポーツを通じて



サッカーチーム・シャドーズ
なり た りゅうせい
成田 龍生さん

言葉が分からなくても 気持ちは伝わる

ネパール人の皆さんとサッカーを楽しんでいます。言葉の壁はありますが、簡単な言葉やジェスチャーで気持ちを伝え合っています。



サッカーで言葉以上につながる

料理をきっかけに

外国人を身近に

外国人と話せるようになりたいと思ったのが教室への参加のきっかけ。こうした小さな交流が大切だと思います。参加すれば外国人が身近に感じられます。



国際交流協会 会員
むら お よし こ
村尾 善子さん



ダニエルとシチューを作る(世界の料理を楽しむ会)

日々のあいさつから



本城第一自治会 会長
やまざき かずみち
山崎 和道さん

分け隔てなく 地域の一員として

外国人、日本人と分けず、まずは気軽にあいさつし、丁寧（丁寧）に話すよう心掛けています。今では困った時に助け合える関係ができています。



日常のささいなことも話せる仲に

地域の祭りで

神輿で深まる地域の絆

三里塚祇園祭に参加して4年目。フィリピンと日本の祭りは似ているところがあり、親しみを感じます。神輿を担いだり、踊ったりしながら地域のひとと交流しています。



ケビン・ボロランさん
フィリピン出身



地域のひとと会話が弾む

身近な問題で困っている人には 外国人総合相談窓口

市では、外国人の生活を支援するため、外国人総合相談窓口を開設しています。近くに困っている人がいたら、教えてあげてください。
受付時間＝午前9時～午後4時30分(土・日曜日、祝日、年末年始を除く)

場所＝市役所2階 市民協働課内

内容＝健康保険、年金、税金などの日常生活での困り事

対応する言葉＝英語、ネパール語、タガログ語、ベトナム語、中国語、シンハラ語、インドネシア語、タイ語、韓国語、スペイン語など33言語とやさしい日本語

※くわしくは市民協働課(☎20-1507)または市ホームページへ。



市ホームページ



一人一人丁寧に寄り添います

成田で学び、働き、暮らす

外国人は特別な存在ではなく、私たちと同じように、一人一人に暮らしたり成田への思いがあります。共に暮らす人たちに思いを聞きました。



地上から空の運航を支える

落ち着いて暮らせる成田が好き



身振り手振りを交えて

日本の文化に触れて暮らしたいと思い、アメリカから来ました。日本で困ったのは、敬語や生活の手続きが分からなかったことです。ガスが止まった時は連絡先が分からず戸惑いましたが、同僚に相談し、助けてもらいました。

今は中台小学校で英語を教えています。子どもたちが楽しめるよう授業を工夫し、「楽しかった」と言われるとうれしいです。車がなくても移動しやすく、落ち着いて暮らせる成田が好きです。



外国人講師 (ALT)
ストラウド・アヤノ・サシャさん
アメリカ出身

いろいろな国の人と出会える



空港を支える一員

ミャンマーで大学に通いながら日本語を学び、治安のよさに惹かれて来日しました。仕事の専門用語や敬語、バスの乗り方、ごみの分別など、初めは分からないことばかり。自分で調べたり、職場の人に教えてもらったりして、少しずつ暮らしに慣れました。

成田祇園祭では、自分から声を掛けて、さまざまな国の人と知り合いました。いろいろな国の人と出会えるところが、成田の好きなところですよ。



JALグランドサービス
テッ・ウェー・フウさん
ミャンマー出身

近所とのつながりを大切に



成田ケンコウファーム

アティック・ムザキさん

インドネシア出身

日本で農業を学び、いつかインドネシアで生かしたいと思い、来日しました。今はレンコン作りに携わっています。

近所の人とはあいさつを交わし、インドネシアについて尋ねられたことをきっかけに、会話を通じて親くなりました。卵を分けてもらったこともあります。空港が近く、母国にも帰りやすい成田。これからも地域の人とのつながりを感じながら、暮らしていきたいです。



ブランド「成福れんこん」の出荷に携わる

利用者との会話が楽しい



食べやすいように利用者に寄り添う

日本の介護を学びたいと思って来日しました。当初は、言葉が分からず、病院で先生の話を理解するのに苦労しました。分からない言葉はスマートフォンで調べ、職場の人にも相談しながら、仕事を通じて少しずつ日本語を身に付けました。

今は利用者と話すことが楽しく、「ありがとう」と言ってもらえることがうれしいです。成田は静かで住みやすく、子育てしやすいところが好きです。



特別老人ホーム成田苑

フォン・ダン・

ゴック・ヒュウさん

ベトナム出身

地域を守る活動の中で



成田市消防団女性部
(国際医療福祉大学医学科3年生)

イ・ソルミンさん

韓国出身

大学進学を機に日本へ来ました。初めは「自分は外国人」と感じ、悩みを話せる人がいませんでした。

友人の活動を見て消防団に入り、団長や団員と話す機会が増え、今では将来のことも相談できる間柄に。消防団は、地域の安全を守るだけでなく、私にとって地域とつながる場です。身近に話せる人がいることを、心強く感じます。いろいろな国の人が住んでいるのが成田の良さ。日本での暮らしになじみやすくしてくれています。



応急手当の方法を地域に広める

共生のカギは成田の強みに気づくこと

外国人材なしに

成田の未来は描けない

成田空港の発展には、そこで働く多くの人の力が欠かせません。機能が拡大し、人手不足が進む中、外国人材の力はますます重要になるでしょう。外国人が成田で働き、暮らすことは、遠い未来ではありません。

だからこそ、外国人が増えることを不安に思うのではなく、これからの成田をどうつくっていくのか、地域全体で考えていく必要があります。

「外国人の問題」ではなく 一人一人の問題として

外国人との間で起きるトラブルは、ルールやマナーを巡るものであれば、日本人同士でも起こり得ます。

大切なのは、何が起きているのかを考えることです。必要なルールは、はっきりと相手に伝える。遠慮して曖昧にすることは、相手にとって親切ではありません。分かりやすく伝えることが、行き違いを防ぐ第一歩です。

海外が身近な成田だからこそ

成田で育った人は、子どもの頃から外国人

を見かける機会が多く、海外や異文化を特別なものと感じにくいのではないのでしょうか。

外国人が増えたと、価値観の違いによるトラブルに目が向きがちです。しかし、外国人と日常的に接することは、市民が世界を知り、外国人と関わる力を育む機会にもなります。

表参道で、成田小学校の子どもたちが外国人に英語で話し掛けていた姿を見かけることがあります。前のめりになって話す子もいて、頼もしく感じます。こうした経験が、世界へ踏み出す人を育てていくのだと思います。

成田の未来に関心を

まずは外国人が身近にいる環境を、成田の強みとして捉え直してみたい。そして、成田のまちや未来に関心を持つ人が増えてほしいと思います。

もし成田から外国人がいなくなったら、空港の発展や地域の未来はどうなるでしょう。空港の発展と、外国人と共に暮らす地域づくりは、切り離せません。

祭りやイベントなど、地域には外国人と出会う機会があります。まずは構えず、あいさつを交わすことから。小さな関わりを重ねることが、成田らしい共生のかたちにつながっていくと思います。



成田の未来を共に考える(市民協働ワークショップ)

成田空港外国人材・定住促進連絡会

しもだ しんご 下田 真吾さん

下田康生堂ぱん茶屋店主。成田空港で働く外国人材が増えるなか、言葉や文化、生活習慣の違いを航空業界と地域が連携して乗り越え、外国人材の定住を後押しする「成田空港外国人材・定住促進連絡会」の発足に携わる。地域おこしに特化した会社「いろはコンサルティング」も経営し、多方面から成田の地域づくりに取り組んでいる。





特集の終わりに

取材中に出くわした2人の女の子。手をつなぎながら、お互いに「かわいいね」と声を掛け合う、なんともほほ笑ましい光景です。

近くにいるお母さんたちに話を聞くと、2人は同じ保育園に通う一番の仲良しとのこと。彼女たちを見て、この特集において大切なシーンになると思い、直感でシャッターを切りました。

このテーマを特集しようと思ったきっかけは、外国人の集団を見て身構えてしまう自分に違和感を覚えたことです。成田で育ち、幼い頃から外国人に接することが日常だった私ですが、外国人による事件のニュースや、それに対するSNSでの心ない書き込みを目にした影響があったのかもしれません。

海外にポジティブな印象を持ちながらも、日常の中で見る外国人にどこか不安を感じるといふ人は多いのではないのでしょうか。そんな時こそ、国際都市・成田に生きる市民としての誇りを胸に、一歩踏み出してみましよう。写真の2人のように、「外国人」としてではなく、このまちで共に生きる人として、目の前の相手を見ることができたらと思わずにいられます。

特別なことではなく、まずはあいさつから。この特集が、共に生きる未来へつながることを願っています。